

お母さんの本棚・図書館の仕事

1960(昭和35)5月、市川市立図書館は全館使用準備として1か月間休館した。2階にあった教育委員会と市役所の一部が新庁舎に移転したの
で、全館を図書館仕様にするためである。この時、「お母さんの本棚」という母親専用のコーナーを発展、拡大して「母と子の部屋」を設けるとい
うプロジェクトが実施された。

部屋を新設するだけでなく、「お母さんの本棚」用の本の配列基準を見直し、図書館の全蔵書から、「お母さんの本棚」と「子どもの本棚」用(小学低学年までの)の本を選び直し、整備し直そうというのである。

基準の見直しを全員であっとうだ
とやったことで、計画の目的、内容を
共通認識することができた。仕事は
円滑に進んだ。さらに後に「夜間営
業」が行なえるか、行なうにはどうす
るか、全員による徹底討論を経験し
た。夜間開館は実施された。貴重な



「お母さんの本棚」用には分けられた本。みんなでチェックする。1960/5。市川市立図書館

体験であった。一つの企画を成功させるには、ヒトを動かすとはどういうことなのか。

この二つのプロジェクトの発案とリーダーは山岡寛章図書館長だった。今考えると、まことに見事に組織を束ね動かしたものだと思える。

後に私は、市川学園図書館で、全国的な大会のプログラムの1日を担当したが、リーダー役はまったく向いてないと思える。自分の限界を知ることとなる。

学園の先輩でもあるY先生が「市川学園五十年史」の編集責任者となつた時、打ち合わせや担当を守る編集委員は少なかつたと話してくれたことがある。私は違つて嘆きだが、誰でも悩み苦勞するんだと、安心感というか、Y先生に親近感というか、そういうようなものを感じた。



仕分けチェックの際は「装備」し直し。用務員のAさんもちょうどお手強い。市川市立図書館 1960/5。

COVID-19 SARS-CoV-2 601YB2441A30E484Q1402RYC0V01
ワクチン接種済ませました。さあ書で歌めや歌えやどんちゃん騒ぎ、とはかないように。ファイルの連打は早い。戦いは続く。



図書館学大講義・図書館の仕事



「本棚」の豆本

教師という肩書の時、高3の選択授業をひとつやれ、と命じられた。図書館とか図書とかについての話をしろというわけ。図書館学とか書誌学なんて興味ない。話したり授業したりする蓄えがない。とはいえ、図書館専門職として雇用され報酬を得ている身となると、イヤとは言えない。

週一コマ1年間のスケジュールをひねりだした。書物の形態について1回予定した。話だけでは面白くないのは百も承知。大きな話のところでは、図書館にある大きな本を見せ触らせた。一番大きいのは、サンズクリット(梵字)の研究書。こゝの位の厚さで、こんのくらの大きな本が何冊か。古賀校長の知り合いのお坊さんの労作で、校長個人が購入したのか図書館

が支払ったのか。大きくて重くて持ち運びするような本ではない。

小さい方は、いわゆる文庫本より小型なのがあるが、面白くもなもない。で、こういうこともあろうかと自費で手に入れておいたのが写真の豆本。ケースの縦の寸法が25³/₁₆。豆本蒐集家でない素人が手に入れられるのはこの程度、という大きさとオ値段。『ホイットマン詩集』という題名で、本文は活字ではなく、写真からの印刷のようだ。

巻末に「使用した金箔類はすべて純金です。皮類は本皮。綴じは本格の糸綴じであることを誇ります。ブックデザイン星野麻夫」と記してある。

reliure・図書館の仕事

鑑蔵読書会の「文集さくへき」を製本中の写真が出てきました。図書館のSさん撮影とあります。場所は閉館後の「母と子の部屋」です。

「文集さくへき」はざら紙(わら半紙)1枚の両面に4頁分を印刷して二つ折りしたものを重ねて1冊としました。この二つ折りしたものが折帖(おりじょう)にあたります。いわゆる本ですと、普通は16ページ分を単位(業界では台と数えるようです)にして背中央で綴じて1冊とします。かがりといひいます。

我々にはそういう技術も道具も有り



「さくへき」製本中の蔵書師書会の皆さん。市川市立図書館 昭和39/12/10. 図書館員 S氏撮影

ませんでしたが、背中近くを図書館所有の大型綴じ器でガチャンと綴じていっちょあがり。

今年1月の新聞に、お気に入りの紙、お気に入りの紙入りの紙で世界に一つのあなた好みの手帳を作ってみませんか、という記事が出ました。いとも簡単に作れるように紹介していましたが、重たい折り帖の、折り目のところを針と糸で縫ってつなげるだけなのですが、実際にやるとぐずぐずになることを受け合います。

お母さん手作りの絵本の作り方というのがある、手作りなさった方もおいでしようが、そういう経験がある方もかがり綴じには手を焼くはずで。

市販の本では、それなりの見た目の良さとそれなりの数をこなさなければなりません。それなりの技術を持った職人と、それなりの道具があって出来る仕事なのです。

私が図書館で行っていたのは、

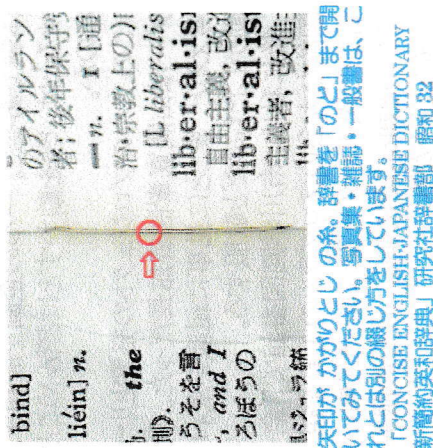
図書館製本とも言われる簡易な方法で、平綴じといえます。

かがり綴じは、司書補の勉強の時に自分の本でしたことがあります。元のように開きやすく仕上がりますが、手間と時間がかかります。(司書補：しよほ。司書を補助する。高卒で得られる)

綴じるところまで済んで、仮の表紙がつけてあるという洋書をみたことがあります。仮り製本と言ったと思います。かつての欧米では、この形で販売され、気に入ったら製本屋に頼んで、しっかりと表紙をつけて大事にしたのだと聞きました。特に大切な本は、表紙は革で包み、タイトルや口は金箔で飾る。reliure。リユールと読むと思いますが、フランス語なのでイさんにおまかせします。

日本でリユールというと、芸術品のように飾り立てる仕事をする人を指すようです。作品の中には、きれいで見事だと感心するものがあります。

「装丁」という言葉があります。原稿を、販売する形にする全般。読者に内容をアピールし手に取ってもらえるようにするための、表紙の用紙やデザインから本文の活字などすべてを指すようです。タさん、「ソフィーの世界」という売れなかつた哲学入門書の表紙をガラリと変えたらバカ売れしたそうですヨ。(NHKテレビ「美の壺選・本の装丁」2020/9/13.)



よろず相談・図書館の仕事

司書(ししよ)という図書館専門職の資格を取る勉強の中で、「レファレンス(reference)」を学びます。

図書館所蔵の資料と利用者とは結ぶ橋渡し役で、図書館の大事な仕事のひとつです。

船橋特産ホンビノス員のことをもう少し詳しく知りたかった。新しく知られた種類のたぬき、船橋中央図書館には資料が少なくない。一緒に探してくれた職員が「インターネットに出ている」とコピーを持ってきてくれた。

図書館の、このような仕事をレファレンスといいます。相談事務、参考事務などともいいます。

なんでも相談にのりますが、いくつか制限があることを教わりました。

一つは、公序良俗に反しないこと。

完全犯罪や特殊詐欺の方法は、知っていても、答えてはならない。しかし、公序良俗とはなにか、どこからが反するのか。以前、購入図書の問題選定とか閲覧禁止・制限とかが問題になったことがある。風俗的・政治的に過激な本の選定、選定へ圧力があつたのなかつたの、図書館の立場とはどういふことか。違ふ体制の国の様子を知らず、疑問だ。

もう一つ。図書館員は資料の紹介をするまでが役目で、答えは利用者自身が見つけるのだということ。遺産相続の争い、算数の宿題を解くのは本人自身で、館員は法律の解説書、算数の参考書を紹介するのが役目、ということ。法律相談所でも家庭教師でもないというわけ。しかし原則は原則。問われればついつい一緒に考え一緒に悩み喜ぶ、という顛末になる。

図書館にある資料は限られている。昔は「当館には有りません、ごめんなさい」で終わりました。今は、ほかの館の資料も利用できる仕組みが出来ています。インターネットも図書館の守備範囲になっているようです。

相談係と看板がなくても、どこで誰に尋ねてもよい。その図書館員が苦手としていたなら、それなりの係なり職員なりを呼んでくれる。管だ。